

昭和20年（1945）8月15日の玉音放送は、17歳で聞いているので、生涯忘れることはない。敗戦時の思い出に、今も大切にしている一枚の古地図があるので、それをご覧に入りたい。

昭和20年12月25日発行の『戦災焼失区域表示・帝都近傍図』（日本地図株式会社）である。（写真参照）

この地図を見ると、荒川放水路を境に、葛飾区と江戸川区は、ほぼ無傷の状態だが、東京の下町と呼ばれる深川、江東、本所、日本橋、向島、荒川、下谷、浅草などの各地区は、全面消失の赤表示されていて、空襲の凄まじさを物語っている。

浅草の地場産業である靴産業が、この焼け跡から立ち上がったということ、感じ取って欲しいと載せたのだが、日本中の日本人が、敗戦のショックで茫然自失してい

るさなか、復興を見据えて、冷静に仕事をしていた人がいたということに、深い感動を感じる。

戦後の混乱期らしい話だが、焼け跡から掘り出して来た焼けミシンを、部品だけ新品に取り換え、再生ミシンと称して売り歩く人もいた。

当時はまだ、足踏みミシンが主流で、電動モーターなどは、夢のまた夢の世界だった。電気は毎日のように停電があって、当てにはならなかった。

スキヤ橋の小売部では、停電に備えて、急遽ガス燈で対応することにした。ガス管を天井に這わせ、輝くほどの明るさではなかったが、ローソクよりはマシであった。まるで明治時代に逆戻りしたようで妙であった。

